

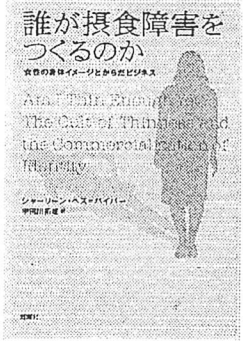
誰が摂食障害をつくるのか

シャーリーン・ヘスラーバイバー著

摂食障害（過食症と拒食症）を訴える女子学生が急増しているの
で原因探求に力を貸して欲しい。
社会学の教授である著者は大学か
らの依頼を受けて調査を始める。
マリリン・モンローを理想とした
のは一九五〇年代。それ以降は細
身であることが美しさの基本にな
ってきたことは確かである。

学生（男子も含む）へのインタ
ビューにより、その実態を捉えた
著者は、これを「スリム教」とい
う「カルト宗教」のなせる業であ
ると考えるようになった。カルト
宗教では、ある目的や理想を実現
しなければならぬという強迫観
念の下、儀式的パフォーマンスが
なされる。スリムになるための行
動実践を見ているとまさにこれと
しか言いようがないのである。

スリム教の信者は圧倒的に女性
である。理想体重に二つ、医学的
なものや文化的なもの（ダイエツ
トセンター作成）があり、後者は



誰が摂食障害をつくるのか

食の文化とイメージから見たビジネス

And Thin, Eating for The Cult of Thinness and the Commercialization of Healthiness

シャーリーン・ヘスラーバイバー

新曜社

1997

「スリム教」生むビジネスの実態

前者より男性で一キロ、女性では十キロも低い。これをめざそうと本人も思い、周囲もそれを評価する。それを煽るのがビジネス。「からだビジネスほどずてきな商売はない」（三章と四章）のである。ダイエットに関する食品・本・講座、フィットネス、美容整形とビジネスは膨らむ。あれがダメならこれ。その中で摂食障害になっていく。拒食と過食は、現実的には逆に見えるが、文化的に正しい身体になれという強迫が生み出した行動として見れば、根は同じなのである。

この文化は、子どもや男性にも広まっている。ティーン前の少女向けの雑誌やバービー人形などすべてが「スリム」というメッセージを出している。男性も外見への関心が強くなり、その一つに「スリム」が入ってきた。肥満を肯定的に見ていた黒人やラテン系の人にも変わってきた。

ここにまた新しいビジネスが生まれる。セルフヘルプやセラピーへと展開する様子を追っていくと、だんだんばかばかしくなってくるが、まさにこれは現代社会の象徴であり、同じ現象は日本にも見られる。文化も経済も大事だが、それが人間の本质を歪めるところまで行く現代が恐ろしい。

（宇田川拓雄訳 新曜社・二二八五〇円）

▼著者は米ボストンカレッジ社会学教授。女性学、社会学調査などを担当する。

JT生命誌研究館館長

中村 桂子